

紫上論補遺（絶筆）

——中の品と考える説について——

森岡常夫

近時、紫上を中の品すなわち中流の女性と考える説が提案されている。これを取り上げて考えてみたい。たしかに紫式部は、上流の女性たちにはあまり関心と熱情を持たなかったようにみえる。源氏をめぐる女性としては、葵上・朧月夜・女三宮はそれぞれ権門の出であったり、先帝の姫であるから、これらの人々は上流中の上流と言えらると思ふ。先ず葵上について言えば、源氏はその最後には彼女をいとおしんでいるが、必ずしも幸福な夫婦とは言えなかつた。これには源氏の心に、藤壺に対する思慕があつたということもあるが、やはり源氏を引きつける魅力に乏しく、夕霧を残して早々と舞台を去つたのである。朧月夜は源氏の須磨淹流の原因となつた程で、本来結ばれる仲ではなかつたのである。女三宮は先帝の皇女の降嫁として表面的には源氏の生涯の光栄のようにみえるが、この頼りない姫の前途を憂慮した朱雀院が節を屈して、後見として源氏に頼み込んだのである。そして柏木との事件によつてやがて出家入道したのであるから、結果的には自滅したとも言えるであらうと思ふ。

帚木の巻において馬頭が、思いがけないところに思ひの外の美しい人がいるのを見出したのは、限りなくめずらしく思われると語り続けているのを聞いて、源氏は「いでや、上の品と思ふにだに難げなる世を」と思っている。これは葵上を念頭に置いていることかも知れないが、紫式部の考え方であらう。源氏物語には、皇女や権門の娘について描くところは比較的少ないのである。

しかしながら、女主人公紫上を中の品と言えらるであろうか。皇女や権門の出自でなければ、中の品に属すると言えらるであろうか。これについて重松信弘氏は、近時「源氏物語の主題と構造」において、萩原広道らが帚木・空蝉・夕顔三巻を一括する説に反し、それに若紫・末摘花二巻を加えて一つのグループとして考えられているのである。その理由として、「空蝉・夕顔・若紫・末摘花の四人は、第一に、源氏にふさわしくない中の品の女であること、第二に、いずれも雨夜の品定によって、興味を持つようになったこと、第三に、いずれも異様のものであることの三点において、共通している。帚木三帖の女二人だけを特別に取出して、一括する理由はなく、寧ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。品定による中品の女への興味は、末摘花で懲りたのか、この後は中の品の女を探訪しない」(同書二一六ページ)と述べておられる。

それにしても若紫が果たして空蝉・夕顔と同等に考えられるものであろうか。先ず帚木の巻の雨夜の品定め of 意義について考えると、これが源氏物語全体の総序であるというような考え方は適切であるとは言いがたい。作者の女性観を述べているのであるから、今後の巻々に登場する女性と通ずるところのあるのは当然であるが、しかし桐壺の巻の次に序を置くというのも不可解である。源氏の藤壺に対する思慕はどうにもならないことであるし、またそれから先の経過を直写することは作者の好まないことであるから、暫く源氏の見知らぬ中の品の女性を相手に遍歴させようというのであろう。雨夜の品定めは、空蝉や夕顔を引き出すための前置きとして書かれたものである。それにしても長すぎることは事実であるが、作者は評論家的資質を有しているから、思わず興に乗って書き続けたのであろう。音楽・書・香・絵画などに関する評論と考え合わせるべきであろうと思う。そしてまた、評論的な部分を好む読者のあったことも現代と同様であろうと思う。これによって中流の女性の世界に源氏が開眼し、垣間見に興味を抱くようになったことは事実であるが、しかし空蝉・夕顔の話は、夕顔の巻の巻末で一応まとまっているのである。夕顔の巻巻末の「過ぎにしもけふ別るるもふたみちにゆくかた知らぬ秋のくれかな」と詠んだ源氏の歌は、その事実を明示している。末摘花の巻は直接夕顔の巻の系統を引くものであるが、若紫を空蝉・夕顔と一括して考察することは構成の上から考えても不可能である。

しかしながら、若紫の巻が帚木の巻や夕顔の巻と全く無関係であるとは言いがたい。すなわち雨夜の品定め of 結末のところに、「君は人ひとりの御有様を、心の中に思ひ続け給ふ。これに足らずまたさし過ぎたる事なくもし給ひけるかな、

とありがたきにも、いとど胸塞る」とあって、源氏は藤壺の理想的な姿を思い続けている。更に同じ巻の、空蟬の許に忍ぶところで、女房たちが自分の噂をしているのを聞いて、「思すことのみ心にかかり給へば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏さむを聞きつけたらむ時など覚え給ふ。異なることなければ、聞きさし給ひつ」という源氏の心境は、ただ藤壺に対して思慕の情を抱いているだけではない。人に漏れてはならない秘密の存在することは自明である。そして夕顔の巻には、夕顔の急死に直面して、「命をかけて、何の契にかかるめを見るらむ。わが心ながら、かかる筋におふけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先の例となりぬべき事はあるなめり」と、藤壺に対する罪を源氏が深く意識していることを述べた箇所がある。その文章の分量は少ないが、いずれも要所要所に置かれているのであって、源氏と藤壺の交渉の展開が側面から描かれているのであるから、かような意味で帯木の巻の兩夜の品定めや空蟬の話、夕顔の巻の夕顔の話は、若紫の巻に結びつくことが認められる。源氏が若紫に深く心をひかれたのは、藤壺に似通うところがあつたからである。

三

構成上、空蟬・夕顔のようないわゆる中の品の女性たちを描いた世界を、主題の世界に統合しようとする作者の創造的努力は認めざるを得ないが、しかし若紫を空蟬や夕顔と同列に中の品と認めることができるであらうか。馬頭が兩夜の品定めにおいて、中の品について一応の定義を下しているところをあげれば、「なりのほれども、もとよりさるべき筋ならぬは、世人の思へることも、さはいへどなほ異なり。またもとはやむごとなき筋なれど、世に経るたづき少く、時世にうつろひて、おぼえ衰へぬれば、心は心として事足らず、わろびたる事ども出で来るわざなめれば、とりどりにことわりて、中の品にぞ置くべき」と語り、更に國の守として身分が固定した中にもそれぞれ区別があつて、中の品として見るべきものを選び出すことのできるご時勢であるというのである。

空蟬は人柄の聡明さと爽やかな出所進退によって、その容姿の欠点も十分に取り繕われているのである。源氏は三度まで彼女に迫り、その後も彼女を忘れてはいない。作者も空蟬のことを決して悪くは描いていないのである。しかし空蟬は自らも自覚しているように、老いたる地方官の妻として、その身分は決まってしまうのである。空蟬の父親は右衛

門督（中納言）であったが、既に故人になっている。馬頭の定義からするならば、空蟬は典型的な中の品の女ということになるのである。常夏の女は三位中将の姫であるが、わが身の置きどころもなく、頭中将の許から身を隠さざるを得ない人であった。それが源氏に見出された夕顔であるが、その出自運命を考慮するならば、彼女も典型的な「中の品」の女性である。

そして「中の品」ということは、帚木の巻の雨夜の品定めにおいてのみ用いられている語である。若菜上の巻において、夕霧の姿を描いて「物清げなるうちとけ姿に、花の雪のやうに降りかかれば、うち見上げて、しをれたる枝すこし押し折りて、御階の中のしなの程に居給ひぬ」とある場合の「中のしな」は、全く別である。これを除けば帚木の巻の五例のみである。

四

夕顔の系統を引く者として末摘花がある。これは決して血縁関係などの因縁があるのではなく、夕顔のような人の再来を望んで図らずも出逢ったのが末摘花であったというのである。従って源氏の意図としては夕顔の風趣を求めることであったが、それが末摘花に流れているわけではない。末摘花は夕顔とは全く別個の人格である。従って夕顔の再来を求めるのは、末摘花に出逢う動機になっているにすぎない。末摘花は雨夜の品定めの世界では全くその登場は予想されない人物であるから、そこで品定めが行われるわけではない。従って末摘花を空蟬や夕顔と同等に品定めすることはできない。これを拡大して用いたとしても恣意的なものであって、作者の意図とは遠いものである。

また玉鬘の方は末摘花とは事情を異にし、夕顔の娘である。帚木の巻において、常夏の女としてそこに幼女があることを明らかにしているし、夕顔の巻に至ってもその巻末において、彼女の形見としてその女兒を手に入れたいと源氏は考えている。かように玉鬘は帚木・夕顔の二巻にあらわれる娘であるから、末摘花に比して夕顔との因縁は深い。しかしその幼女の品定めは、作者の考慮するところではなかった。今後いかなる運命が展開するかはわからないことであるから、到底品定めの対象となる人ではないのである。従って玉鬘一人を取り上げて、これを中の品（中流）とする説を聞かない。しかしながら、武田宗俊氏が藤裏葉の巻までの成立論において、紫上系・玉鬘系の二系列を立ててその成立の経過を考察さ

れたのであるが、ここには主流対傍流の対立と共に、上流に対する中流という意識がなかったとは言えない。それにしても、空卿・夕顔・末摘花・玉鬘と一括することは、必ずしも合理的であるとは思われない。これら四人を統一する共通性は必ずしも認められないのである。中の品というのは雨夜の品定めの場合にのみ

添書

本稿は森岡先生がお亡くなりになる数日前まで執筆されていた御論文の草稿である。A五判のルーズリーフノートに九ページにわたって丁寧に書かれているが、ところどころに語句を訂正したり挿入したりした跡が見受けられ、今後なお推敲を施すおつもりもあったものと推察される。それにしても論なかげに中絶しているのは、何としても惜しまれてならない。本稿を「紫上論補遺」と題されたのは、これが『平安朝物語の研究』所収の「紫上論」を補強するべき一編であったからだと思われるが、さらに晩年の紫上について論じられた「紫上の立場―女三宮の降嫁に對して―」（『源氏物語の考究』所収）なども併わせ読むならば、源氏物語の女主人公としての紫上に關する先生の根本的なお考えは十分に理解できるであらう。

御入院先へお見舞いにあがったとき、先生は紫上を中の品と見なすことの非を力説され、「『文芸研究』の岡崎義恵先生追悼号には、ぜひこの問題を取り上げて書きたい」と話しておられたが、まさに本稿はそのための草稿として筆をとられたものだったのである。このように最期まで源氏物語を愛し、その研究に没頭された崇高なまでのお姿を偲ぶべく、御遺族のお許しを得て、ここに先生の絶筆としてこれを掲載した次第である。

（工藤進忠郎）